

“般若波羅蜜多心經略疏（唐の法藏述）”に示された空の考察

三宅 寛・木下 富夫*

岡山理科大学理学部基礎理学科

*岡山理科大学非常勤講師

(1999年11月4日 受理)

賢首大師法藏（唐時代の華嚴学派の大成者）は、空をどのように解受していたかを彼の著「般若波羅蜜多心經略疏＝以下略疏という」（大正蔵no. 1712）によって知ろうと思う。般若波羅蜜多心經を、以下、經とする。

空の誤解を正すために、略疏は空の説明のために、はじめに「宝性論＝大正蔵no. 611」の文を引用して三つの誤解を正そうとしている。

- (1) は 疑空異色，取色外空＝空は色に異なるとして，ものの外に空を認めるもの
- (2) に 疑空滅色，取断滅空＝空は色を滅すとして，ものを滅したところに空をもとめる
- (3) に 疑空是物，取空為有＝空は色であるとして空を有とするもの

以上の3種の誤解に対し、下の三つの論をもって解決しようとする。

- (1) には 今明色不異空，以断彼疑 即ち色は空にことならない。
- (2) には 今明色即是空，非色滅空，以断彼疑 即ち色は空である。色は空を滅してあるのではない。
- (3) に対して 今明空即色，不可以空取空 といっている。即ち空が色である。空を以て空を扱うなという。

略疏はこれによって三疑即尽，真空自顯 即ち疑いが除かれて真空が自ら顕れるという。

色と空との関係については、次の三を認めている。相違義・不相關義・相作義である。

相違義は”空中無色以空害色。準此応云色中無空以色違空故。若以互存必互亡故”という。これは空の中に色なくまた色の中に空はない。空は色を否定し、色は空に違し、空と色とは互いに否定し合っているということである。

不相關義は”以色是幻色必不關空。以空是真空必不幻色。若關於色即是断空非真空故。若關於空即是実色非幻色故”という。即ち色は幻の如きものであるから、空を妨げず空は真空であるから幻色であることをさまたげない。もし空がものを斥けるというならば、その空は真空ではなく断滅の空となり、他面、ものが空を斥けると云うならば、ものは幻色ではなく実色となる。

相作義は”若此幻色举体非空不成幻色。是故由色即空方得有色故。大品日若諸法不空即無道無果等”と述べている。言い換えると、若し幻色がその全体をあげて空でないならば幻色ではない。即ち色が色として成り立つのは、空により他面、空が真空として成り立つのは幻空によると云うことである。

略疏はこれを証するものとして、中論（印度僧竜樹 200 頃）の文を引用している。”以有空義故一切法得成故真空亦爾。準上応知是故真空通有四義”そして真空の立場からすれば、(1) 廢己成他義(2) 泯他顯己義

(3) 自他俱存義(4) 自他俱泯義が主張できる。即ち空の義あるを以ての故に一切のものが成じ得るという。例えば土が空なればこそ、焼いて茶碗に成り得る。土が空でなければ、どこまでも土であって茶碗に成り得ない。(1) の己を廢して他を成ずるとは、空が色として表現されているから、現前したものはただ色のみであって空は隠れている。(2) 他を泯して己を顯すとは、色が空であるから、ただ空のみが現前し、色は隠れている。(3) 自他俱存とは、色は空に異ならず、幻色であるから色は現前し、空は色に異ならず、真空であるから、幻色が隠れ、空が顕れになっている。このように顕れていることは、隠れていることであり、隠

れていることは顕れていることである。これを穩頭無二という。自を肯定することは、自を否定することであり、他を否定することは却って他を肯定することになる。肯定は否定であり、否定は肯定である。法蔵のいう穩頭無二の哲理である。(4)自他俱に泯ずるとは、空は色であるから空のみ現前して色は泯び、色が空であるから、色のみ現前して空は泯ぶ。かく互いに他を泯して、色も空もともに否定され、空でもなく、色でもない。

更に色の立場からも、(1)頭他自尽(2)自頭隠他(3)俱存(4)俱泯の四が認められる。そして、”是即幻色存亡無閑。真空隱頭自在合為一味円通無寄”という。ここで色に関しては存亡といい、真空については隱頭と云われる点に留意すべきである。色が存するとき、空は隠れている。しかし、亡ぶのではない。他面、真空が現前するとき、色は亡んでいる。そこには色がなく、ただ真空のみが現前している。

空は隱頭一際であるが、色は存亡無碍である。前の自他俱存の義に於いては、空と色とについて隱頭一際が説かれた。そのところからするならば、色について存亡といわれるべきではなかろう。空が現前したとき、色は亡ぶのではなく、色は隠れるにすぎない。ところが、ここでは存亡といわれる。色が現前していることは、空が隠れていることであり、空が隠れていることは、同時に空が頭になっていることである。空が頭に現前しているとき、色は亡ぶといわれるところに、色本来無の考えが潜んでいる。色が現前しているままで、本来無である。かようにして、空と色とは一味となり、円通して全く吾人の思惟を容れない。即ち無寄である。

略疏は勸行(実践)について空と色との関係を説く、即ち”勸色即空以成止行。勸空即色以成觀行。空色無二一念頓現。即止觀俱行方為究竟”これは、色即空と觀するとき、種々の雜念がとまり、空即色と觀するとき智恵による觀法が成就する。空色無二であるという、そういう一念が頓起するとき、止觀は俱に成就する。これが、究竟の境地であるというのである。

更に”成大智而不住生死。見空即色成大悲不住涅槃。不二悲智無住処行”とある。色即空と觀するとき(色と空が二つあって色が空になるというのではない)、大智が成就して生死を離れる。大悲が成就して涅槃に住しない。涅槃という固定的なところに住することなく、慈悲と智恵とが無二である。ここに無住処行が成就する。一ヶ所に住するは悟りの世界ではない。

また、經には空相は不生不滅・不垢不淨・不増不減とあるが、この經説を法蔵は位と法と勸行との三つの観点から説明している。先ず第一に位について、凡夫位にあっては、凡夫は生死に流転している。真空は、かかる生滅流転を離れているから、不生不滅である。菩薩位にあっては、惑障は未だ尽きていないが、既に淨行を修しているから、垢淨位といわれる。真空はかような垢と淨とを離れているから、不垢不淨である。最後に仏の位にあっては、惑障はすでに尽きているから、滅であり万徳は円満しているから増である。真空はかような増減を離れているから不増不減であるという。これは、經の不生不滅・不垢不淨・不増不減を凡夫、菩薩、仏の三つの立場で解しているのである。

第二に法については、真空は色に即してはいるが、色のように生滅するものではない。また流転にあっても汚れず、惑を出でて、淨であるのでもない。また、障のつきる時、滅じるのではなく、万徳の円満するとき、増す訳のものでもない。生滅、染淨、増減は有為のすがたである。真空はかかる有為の相の否定においてのみ現される。

ついで、勸行については、謂於三性立三無性觀とある。三性は遍計所執性、依他起性、円成実性である。三無性觀とは、無相觀、無生觀、無性觀の三である。遍計所執性には、無相觀をあてる。遍計所執は縁生によって生じた実態のない存在を実態ありと誤認する心や、その存在のすがたをいう(新・仏教辞典、中村元)のであるから、無相であり、本来、無であるから、生滅することがない。これが般若心經で不生不滅といわれているところである。依多起性には無生觀を。依他起は他に依って成り立つから、無生である。そして、他に依るには染(惡)と淨(善)とがあるが、染も淨もともに縁によって、生起せるものであるから、ともに無性であると法蔵はいう。依他起性には上述のように、無生觀といいつつ、染淨は無性と説かれている。依他本来、無生であるというのと縁起せるものであるから、無性であると云うのとは同じではない。無生といいつつ無性と説かれた点は何を意味しているのか。法蔵は無性であるから、染でなく淨でないと説くのである。省みれば、真諦(499～569)は依他性本来無生という立場をとり、玄奘(600～664)は縁生せるものであるから、無性と云う立場をとっている。円成実性は、真実の体である真如(新・仏教辞典)のことで、

円成実性の無性について、前の遍計所執と依他起とは有ではないが、円成は減じるのではなく、智をもって対処しても増さず、在纏（迷い）と出纏（悟り）とにおいても増減なしと説かれる。遍計所執と依他起の無によって減ずるものでないと説かれるとき、二性の無が円成実でなく、むしろ二性の無によって、減じないものが認められている。在纏と出纏とにおいて、増減なしと説かれることは、このことを明らかにしている。遍計所執と依他起の二が無そのものでなく、二の無によって減じないものは、それを照らす智の現前するときも、増すものではない。これが、経にいう不増不減である。

また略疏は”妄法無生滅縁起非染淨。真空無増減。以此三無性顯真空相”という。これは妄法の生滅なく、無相であること、染淨の依他の染なく淨なく、無性の他に空相のないことを示している。このように、遍計所執の無相、依他起の無性といって、遍計と依他とについて、空相を論じつつ、他面、真空は増減なしという時には、空そのものについて、論じている。これが、勸行の立場から見た不生不滅、不垢不淨、不増不減の理解である。ところで前の二、即ち、位と法からは、空そのものについて、不垢不淨、不増不減、不生不滅を論じている。

五感と意の空なるについて、経の”是故空中無色無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色声香味觸法。無眼乃至無意識界”とあるのに対し、もしそうならば、その空は色滅の空ではないか、先に空即色と言ったとき、色を滅しなかったのではないか、との疑問が提出される。略疏はそれに対して”前雖不闕存而未嘗不尽。今此都亡未嘗不立”と云う。即ち先に色の存することを否定しなかったが、存するそのまま無であり、今ここですべてを亡じて無というが、無ということとは、存在するままで、無であるというのである。

略疏は”彼真空中無五蘊等。理実皆悉不壞色等。以自性空不待壞故”という。五蘊は色受想行識であり、存在を成り立たせるものであるが、それらは、空の中にはなく、色を壊さずして・・・と云うことは、現前の差別相（AとBは違うという相）そのものが、無であるということを示している。これは差別相の自性が空なればこそであると云うのである。

経は単に色受想行識の無だけでなく、無明も無く、無明の尽きることもなく、乃至、老死無く、老死の尽きることもなしと説き、苦集滅道なしと説き、無智亦無得と説いている。略疏はこれを、真空の所離を明かすと解する。真空中に無明と無明による流転、苦集の無いことについて、それらは色受想行識の場合と等しく、滅を待たないで、無であると解することができる。

しかし、無明と滅道との無とは如何なる意味であるか。経の以無所得故はこれを示している。所得なきとき、ありとして、対象化しないとき、無明もなく、無明の尽きることもない。苦集もなく、滅道もない、智もなくその対象の理もない。かくて、真空の所離を明かすと云われる。真空とは対象化を離れた境地である。対象化を離れるとき、あらゆるものは、あるがままで無である。

ところが、略疏では、”無所得故”を空中に(1)色受想行識眼耳鼻舌身等(2)無明と無明の滅(3)苦集滅道(4)智と所得の四が無い理由と解しないで、むしろ、後の所得を得さしめる因と解して”由前無所得為因。令後有所得”と解している。無所得が真の所得であることは云うまでもない。空觀のめざすところも、これをおいて外にない。しかし、略疏のように解するならば、空中には無明の尽きることもなく、滅道もなく、智もなく、得もなし”と説かれることの理由が明らかにされない。

無所得故は、空中に色なく、智なき根拠でなければならぬ。かく対象化を離れることによって、般若波羅蜜を得、心に罣碍なく、一切の顛倒夢想を離れて、涅槃を究竟す、と経には説くのである。

以上によって明らかなように、略疏における空は、無自性という形相である。その形相は、有なる差別相に対立する有なる形相ではなく、むしろ無なる形相である。よって有なる差別の現象に現前し、その外にあるのではない。差別相のあるがままが空である。略疏は、特にこの点を強調する。中辺分別論の”無二有此、是二名空相”の頌を解して”無二者謂無所取能取有此無者謂但有所取能取無是二名空相”を”是二不二為空相”と解するとき、これを明示している。

空には、二つの意義がある。(1)現象の無であり(2)実在の無限定である。実在は、無限定であるというとき、それが無であると云うのではない。かく解するときは、空に対する甚だしい誤解である。また、実在は

無限定であるとき、現象の背後に無限定なる実在ありと解するならば、それも甚だしい迷見である。空は決して、現象の背後に横たわる無限定な実在ではない。略疏は、前述するところによって明らかなように、このことを明らかにしている。吾人はこれを” 限定の真理は無限定である” と云うことができるであろう。

Concerning about "Prajñapa-ramita-Sutra"

Hiroshi MIYAKE, Tomio KINOSHITA*

Department of Applied Science,

Faculty of Science,

**A Part-time Reader,*

Okayama University of Science,

Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan

(Received November 4, 1999)

I thought of the basis in Buddhism, there is a philosophy called "Ku (空) =Sanyata" Each Buddhist pries, especially academic ones have own Sanyata philosophy. Here I discuss the "Sanyata philosophy suggested by Hozo (法蔵～643-712) "who was a Buddhist priest in China, in my paper which was simply explained Sutra, "Prajñapa-ramita-hrdaya-Sutra".